

脳科学の第一人者である川島隆太先生の第2弾である。今回は、コミュニケーションについて考えていく。

今はウェブを使ったコミュニケーションをせざるを得ない状況ですが、東北大学の学生に、対面で行う時とZoomなどのウェブを使って行う時と同じチーム、同じテーマで議論をさせたところ、対面の時にはきちんと脳の活動の同期が起こりますが、ウェブでやるとそれが生じず何もしないでぼおーっとしている時と全く同じ状態でした。

子どもの教育の基本は「コミュニケーション」で、リアルなコミュニケーションでは、子どもたちの脳にいろいろな変化が起こります。親子の会話は、思考の脳である前頭前野が活発に働き、会話だけでなく親子で共同作業をすると、子どもたちの前頭前野はずっと働きっぱなしになるということも実験でわかりました。

また親子での会話でも、顔を見て会話すると前頭前野が働きますが、携帯電話等を使いながら顔を見ないで話すと脳活動はなくなってしまうという事実もわかりました。

もうひとつが朝ご飯です。バランスのよい朝ご飯を、できれば家族と一緒に食べることによって自然と学力が高くなるという現実があります。

Zoomなどをはじめとしたウェブ会議に、今まで何度参加したのだろうか。もはや当たり前になってきている。抵抗感もない。わずか半年間での出来事である。

コロナの状況があり、仕方なくウェブを使うのはいいのだが、何でもかんでもウェブがいいとは思わない。確かに、対面とは違ったウェブのよさもある。例えば、月に一度の割合で勉強会に参加しているが、オンラインで大阪の方の発表を聞くことがある。東京の方も参加できる。これが、対面だと、大阪や東京の方に福島まで来ていただかなければならない。実現性は低くなる。

大学生である長女のオンライン授業の様子を見たことがある。きっと、多くの大学生が、何もしないでぼおーっとしている時と全く同じ状態だったのだと思う。そのことがわかっているのかどうか、大学の先生は、学生にグループで意見を交換させる時間を設定していた。

大切なことは、対面とウェブの使い分けであろう。すでにお互いに顔が分かっている同士であれば、打合せ程度のものや実践発表の類でもウェブでいいように思う。一方、思考を伴う議論、ディスカッションのようなものは、やはり可能な限り対面がいいように思う。

したがって、コロナの状況が収まったとしても、ウェブ会議は残る。残した方がよい。いつでも使えるようにしておくことが大切である。

親子の会話、親子の共同作業、顔を見ての会話、これらの重要性がどのくらい浸透しているのだろうか。5歳までの重要性とともに、もっと広く知られるべきである。